

異年齢集団活動が児童の発達に関わる可能性*

開 浩一、柿森 昭長**

Possibility of Child Development Through Activity in Diverse Age Group

Koichi Hiraki, Akinaga Kakimori**

Keywords：異年齢集団，児童期，対人関係能力，
社会性，学童保育

要旨

現在、急激な社会変化に伴い児童を取り巻く環境も変化している。その為、時には児童自身が加害者となる事件も多く存在している。社会性や対人関係が不得手なまま成長していく例もあり、児童期に必要な発達課題を克服できないまま成長しているという現状が、事件を引き起こす一端となっていることも考えられる。この対人関係や社会性を学ぶ為には、実際の他人との関わりから、個人が身をもって経験することが必要なのではないかと考えた。さらに、幅広い年齢間、性別の違いを超えた関係の中で生活を送ることができれば、より対人関係や社会性を学ぶ機会となるのではないだろうか。

そこで、本稿では児童期に焦点を当て、この時期に対人関係や社会性を身に付けること、それも個人が幅広い他人との関係から、体験・経験する事による習得がより力になると推測し、その環境として、異年齢集団の重要性を明らかにした。本稿では、そのことを調査により実証するまでには至っていないが、先行研究を用いて、その可能性を見いだすまでに至った。

以上のことから、異年齢集団活動が児童に与える影響として、対人関係能力や社会性の能力の発達に関わる可能性を考えた。

I. はじめに

人間関係能力やコミュニケーション能力は、日常生活において不可欠なものであろう。しかし、近年ではこの能力が低下してきていると共に、変化してきているとも考えられている。実際に、人間関係のもつれから凶悪な事件に発展するといった事もあり、事件が低年齢化してきている現状もあるだろう。

マスコミが加害者の顔を取り上げる際に、その人格 (personality) や性格 (character) を問題視する事が多々ある。それまで歩んできた人生を踏まえ、人格形成 (品性、道徳的規範等) を問題とし、周囲の環境面も含め議題として挙げられる事が頻繁にあるのではないだろうか。個人が形成していく人格は、その個人が培ってきたものだけではなく、周囲の環境も関係していると考え、幼児期や児童期に経験したのも関連していると推測する。

その児童期においても、「いじめ」「自殺」「不登校」といったものが、現代の教育問題であり、社会全体が深刻なものとして捉えられている現状があるだろう。また、児童・生徒の成長・発達や学習などに直接に影響を与える社会体験、自然体験、勤労体験の不足や社会的規範意識の低下なども問題になっている (有菌, 齋藤 2008)。文部科学省による調査*でも、平成18年度からは「いじめ」の定義や捉え方も大きく変わっており、増加傾向にある。また「暴力行為」「不登校」も同じ状況である。このような様々な問題は、児童の人格形成、すなわち個人の成長に関係している事は否定できない。

筆者は特に、児童に関わる問題を危惧しており、人間関係能力や個人の内面の成長が重要なのではないかと考えている。その為にはやはり、周囲の環境や教育も無視する事はできないのであろう。

本稿では、人格形成を人間関係・対人関係能力を中心に据え、その発達を児童期に焦点をあて考える事とするが、そもそも、この他人との関係をどうやって学び、身に付けていく事が必要なのだろうか。筆者はこの事について、個人が経験し、得てきた力が非常に重要になると考え、多くの人間との関わりやその関わり方の「質」が大切なのではないかと考えた。ただ、多くの人間との関わりだけで成長に繋がるのか、といった疑問もあるが、やはり他人との関係は誰かに教わるだけでは

* Received January 31, 2009

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

不十分であろう。自らが他人と接する中で、その事を身を持って経験・体験をする事による成長が、個人の対人関係能力の発達に、多大な影響を与えているのではないだろうかと考えている。多くの人間、幅広い人間との交流が個人の力、発達に関連しているとの推測から、異年齢集団というものを考え、児童の発達に関わる影響を含め、その可能性を考察する。

II. 問題

近年、社会の変化に伴い子どもを取り巻く環境も変化してきている。その事により、子ども自身も以前とは大きく変わってきているだろう。しかし、それは子ども自身が社会に対応し、変化してきたという背景も含まれている事は無視する事は出来ない。ただ、「子どもが外で遊ばなくなった・遊ぶ人間の減少・仲間同士のかかわりが弱くなった。」との問題はあり、社会性や対人関係が不得手な子どもも増加しているという現状もある。子どもが変化してきている要因には、社会環境の変化が大きいものであると考える事が出来る。

子どもたちの変化の背景には、核家族化、少子化、地域の結びつきの希薄さ、地域での異年齢集団の消失等が考えられ、競争社会の中に子どもまでもが巻き込まれている。また、児童期において大切な「遊び」も変化してきており、遊びの中で獲得できる社会性や対人関係のスキルが十分に形成されないまま成長してきているものも少なくない。渡辺ら（2004, 2005）も、これらの背景には、「遊ぶ空間がない」、「遊ぶ時間がない」、「遊び仲間がない」という3問の問題点をあげ、さらに、「保護者が我が子には他者よりも秀でた存在になってほしいと熱心に養育していくあまり、幼少期にたっぷり遊ばせる等の体験を知らず知らず奪っていくという風潮も拍車をかける。」と児童の遊びの変化を危惧している。

また堺ら（2007）も、異年齢での遊び集団が少なくなり、地域での遊び集団が減少した事で、子どもの直接的なコミュニケーション能力や人間関係能力が低下してきたと述べている。携帯電話やメール等による間接的な人間関係コミュニケーションによる人間関係の場面が多くなってきた事もあげ、従来、異年齢の遊びによって構築されたタテ関係がなくなることにより、以前に比べての子どもたちのリーダーシップ能力の低下を指摘している。この事から、児童期には幅広い人間との交流が、今後の人格形成に必要になり、その経験が対

人関係能力の発達に影響を与えるのではないかと推測できる。

そもそも児童期は、組織的な集団生活である学校生活が始まり、それまでの幼児期に見られた自己中心的な考えから、個人差や個性について学ぶ時期である。多くの人間と関わりを持つ最初の段階であり、この時期の経験は、後の発達課題に大きく関わるであろう。児童期の発達課題は学校生活の開始により、対人関係に関する問題や課題を通して、集団的状况に適応し、協調して行動が出来るかである。社会的な場に身を置くわけだが、集団の規則を理解し自分の気持ちや欲求をコントロールしていく事が求められるだろう（荘村, 2003）。幅広い人間関係、つまり異年齢集団での活動は、児童期の発達において様々な要因を含んでいると考えられ、その重要性を理解する必要がある。異年齢集団の持つ重要性や児童に与える影響を考察し、明らかにする事が出来れば、先に述べた現在の児童が抱える社会性や対人関係の問題を改善する事に繋がるかもしれない。地域に消失されたと言われる異年齢集団の存在やその重要性を考える。

III. 児童・社会環境の変化

ここでは先で挙げた児童の変化も含め、その変化にどのような問題点があるのか考察する。

まず、今日の子どもの検討する際に、偏差値等の学歴社会に対する問題を取り上げられる事がしばしばある。だが、社会環境の変化の背景にある問題は、個人がどのような問題を抱えているのかを考える必要があるのではないだろうか。もっと基本的な問題として、仲間（他人）との交わりの希薄さを考えさせられる情報が多いように感じる。後者の観点から考える場合、日常的な異年齢集団は消失していると推測でき、社会性や対人関係が不得手なまま成長している要因はこの事も含まれている可能性がある。他人との関係は、やはり個人が自ら体験する事により、得られるものではないだろうか。

児童期は集団生活である学校が始まる。学習で様々な知識を身に付ける事になるが、「遊び」も重要なものになるだろう。この「遊び」の有効性は、渡辺ら（2004）の先行研究においても、仲間集団形成と関連がある事が示されている。遊び能力、向社会的行動能力、社会的スキルのそれぞれ間に相関があることが明らかとされており、遊びを含めた体験活動を充実させられることでさら

にそれぞれの能力が高まり、ひいては集団生活に
よい影響をもたらすとも考察している。この事から
児童にとって「遊び」は、集団生活、他人を思
いやる気持ち等、社会性を身に付ける一つの手段
となっている事がわかる。

また渡辺ら（2005）は、前述した3問の問題点
を挙げ、遊ばない子どもたちや遊び方を知らない
子どもたちが増えていくと危惧している。さらに、
子どもたちは様々な人やものとの関わりの中で対
人コミュニケーション能力や社会性の社会的スキル
を形成していく事になり、それらの能力を「遊
び」を通じた他者との関係の中で自然と身に付け
ていくべきものであるとしている。だが現代社会
においては、遊びそのものも技術の進歩により変
化しており、他者との密度の濃いふれあいが減少
しているのかもしれない。このような背景では、
自己中心性の強い子どもが増え、耐性不足、いろ
いろなストレスに対する対処の不適応さも表れる
（渡辺ら、2005）。この事から、児童期において
、「遊び」が重要になり、その中でも集団遊びを
保障していく事が必要になるだろうとも説いてい
る。

社会の急激な進歩により、あらゆるものが溢れ
ている現代社会では、児童も変化しているという
事実があるだろう。その為、以前と比べた場合に
違いが見られるのは当たり前のことではなかも
しれない。児童期において、対人関係能力や社会
性の発達に「遊び」が関連し、重要なものである
事を理解する必要がある。

では次に、学校での授業が終わり帰宅するまで
（帰宅してから）、児童は何をして過ごしているの
か先行研究を用いて、検証する事とする。放課後
が児童にとって自由な時間であり、その生活を考
える必要があるからである。

深谷ら（2006）は、放課後の子どもの遊び環境
を調査している（「子どもの放課後全国調査」2004
年冬、秋に実施）。この調査の中で、現在は放課
後の子どもたちのライフスタイルになかから仲間
集団の遊びは欠落していると言っている。遊びの
実態を季節、地域別（大都市部、農山村部、中間
部）、性別に分けデータを集計しているが、「遊ば
なかった」と回答した児童が全体の4割（大都市
部・中間部は4割超、農山村部は4割切）であり、
「遊んだ」とする児童も「家の中で一人で遊
んだ」という回答が多い。（だが、6割の児童は、
遊んでいる事になる）。農山村部・中間部では
「家の外で友達と一緒に遊んだ」という割合も多
い。また、家の中だけで遊んだ児童の割合は3割

を越え、「遊ばなかった」と「家の中だけで遊ん
だ」を合わせると、7割以上の児童の放課後は家
の中という事になる。また、同調査では遊びの仲
間に関して、児童の8割以上が遊び相手として
「同じクラスの友達」をあげている事を示してい
る。放課後も学校での仲間関係は継続しており、
普段の子どもの生活が学校の枠組みに規定されて
いる事がわかるだろう。

この調査結果で、遊ぶ場所として家の中が多い
という事、遊び相手が同年齢の仲間が多いという
事がわかる。他に、遊ぶ場所として、7割以上の
児童が「友達の家」を普段遊ぶ場所としてあげ、
他の遊び場（公園、放課後の学校等）に比べて圧
倒的に多い事もわかっている。

児童が対人関係能力や社会的スキルを形成する
手段として、「遊び」が有効であるとすれば、この
結果を見る限り、現在の児童はその能力を身に
付けにくいのではないかと推察できる。個人で遊
ぶ事も増え、同年齢や家の中だけで遊んでいる
という状況では、狭い人間関係しか築くことができ
ず、対人関係や社会性が不得手なまま成長してい
くのかもしれない。だが、これは一方的に児童が
作り出した問題ではなく、周囲の環境や急激な社
会の変化がもたらしたものであるとも考える事が
できるであろう。

では、このような状況で、児童が対人関係や社
会性を身に付けることが出来る環境とは何が必
要になり、重要なのであろうか。対人関係や社会
性は他人との関わりから身につけられるものであり、
それが異年齢集団だと、より多くのことを学べる
のではないか。

IV. 異年齢集団

現在、地域に異年齢集団は消失されたとされて
いるが、果たしてそうなのであろうか。この章で
は、異年齢集団の存在を確かめると同時に、その
必要性を明らかにする。

1) 学童保育

地域に消失されたとされる異年齢集団だが、そ
の一つに学童保育が考えられる。岩崎（1998）の
調査でも、地域から消失したとされる異年齢集団
が、学童保育で存在している事が確認されている。
この調査では、男女別の集団形成の違いを見出し
ながら、その構成過程での要因を探っており、結
果として、学年を超えた異年齢集団である場合が
多く、同年齢集団より1.7倍の割合で多いことが

わかっている。だが、男女分離型の割合が混合型より、3.7倍である。(これは、認知面・発達面において様々な変化が起る時期である事が考えられる)。集団形成には男女別に特徴があり、その要因を、遊びの違い・遊ぶ範囲・力による要因と考え、特に女子の集団は同年齢集団を形成し易い傾向がみられている。学童保育での基本的な集団は、児童同士の関わりから形成されるものである。異年齢の児童が共に生活している場所である為、個人がどの集団に所属するかは本人次第という事になるだろう。ただ、学級生活とは違い、異年齢での生活となることから、幅広い人間との交流があり、他人との繋がりが出来るのではないだろうか。

また岩崎氏は、「学童保育は、異年齢集団の再興とともに、異年齢集団の新しい在り方として捉えることができる。」と考察しており、地域に見られなくなった異年齢集団の存在を確認すると共に、これからの社会でも、学童保育という場所で異年齢集団は存在すると考えているのかもしれない。筆者も、この考えには肯定的な意見を持ち、異年齢集団は消失していないと考える。

全国学童保育連絡協議会^{*)}によると、現在、共働き・一人親家庭の増加に伴い学童保育も児童福祉法に法制化された1998年の9,627カ所から、2008年までに17,950カ所に増加しており、その必要性がわかる。子どもたちの放課後の生活を保障すると共に、働く親の権利と家庭の生活を守る役割を担っている場所である学童保育では、様々な人間と一緒に生活・活動しており、地域で見られなくなった異年齢集団で構成された「第二の家庭」と呼ばれる場所である。

筆者も長年、指導員としてこの学童保育に携わってきた中で、性別や年齢が異なる人間同士が共に生活・活動している場所が、ただ保育の一旦を担っているだけの場所ではないと考える。子ども社会と言われるような自治的な集団が自然と発生しにくい現在では、大人が意識的に働きかけなければいけない場合もあるだろう。学童保育の活動もそれに当てはまると考えられるが、放課後の児童の生活を保障し、働く親の権利を守る役割と、異年齢集団という様々な人間が共に活動している場所であり、児童の可能性が広がるのであればそれは必要な場所と言えるのではないだろうか。

2) スポーツ少年団

様々な年齢が共に活動しているものの中に、スポーツ少年団の存在も考えることができる。これは、スポーツを通して子どもの健康・体力づくりに役立っているものであり、異年齢の遊び集団の減少と外遊びの減少に伴う問題を改善する一つの要因となるかもしれない。だが、対人関係や社会性を学ぶ場所となっているのだろうか。

堺らはこれまで子どもの遊び集団や仲間集団とリーダーシップの関係についての実証的研究を行っている。その結果、①遊び場面のリーダーシップは女子の方が男子よりも高い。②今の子どもの遊びは、地域よりも学校で遊んでいる。③遊び場面でのリーダーシップ能力の高い子どもは、すべての学校生活場面のリーダーシップ能力も高い。④今の子どもは多人数で行う遊び集団を作る能力はなく、大人の手をかりなければならない。ことがわかっている(堺ら, 2007)。

スポーツ少年団加入の有無で、学校生活場面での差は見られていない。スポーツ少年団加入者は、体育の授業ではリーダーシップ能力は高いが、学校生活においては他の子どもたちと差はみられないようである。④でもわかるように大人の手による管理の中では、リーダーとなる人材が出にくい環境にあるのかもしれない。対人関係や社会性に関して言えば、それを身に付ける為の環境とは一概にいえまいだろう。

だが、異年齢集団での活動であるという事は否定できず、堺らも、「スポーツを子どもの手に戻すこと」、「スポーツ少年団の遊び集団化によるリーダーシップ育成」が必要であるといっている。児童の集団を大人が管理するだけでは、受身になってしまう児童が増え、積極的に児童自らが他人との関係を構築する事に繋がっていかないのではないだろうか。この研究においても、児童にとって「遊び」はいかに重要かがわかる。

中村(2004)は、「子ども会や少年団等の集団活動は、異年齢層の子どもたちから構成される集団であり、この点については、かつての地域の中で自然発生的に形成されていたタテの関係を軸にしたギャング集団と共通点が見いだされる」としている。この事からも、地域に消失されたとされる異年齢集団が、スポーツ少年団という形で存在していると考えられ、その普及が進むにつれ、異年齢集団の活動に触れる機会も増加するのではないだろうか。

3) まとめ

学童保育とスポーツ少年団は、自然発生的な異年齢集団とは言えないが、現代社会においての、新しい異年齢集団の在り方として捉える事ができる。前者は児童の放課後を守る役割があり、後者は体力づくりや健康に役立っているものといえる。それぞれ活動内容に違いはあり、大人の管理のもとに成り立っているものであるが、その生活や活動を通して児童が経験する事があるのは確かなものであるだろう。

本稿では、異年齢集団である両者間で、児童の対人関係能力や社会的スキルの能力に違いがあるのかを実証するに至っていないが、その活動内容や基本方針を明確にし、調査方法を決定すれば、集団として児童に関与するものを見いだせるのかもしれない。異年齢集団が児童の発達に関わっている可能性は大いに期待することができる。

V. 異年齢集団の重要性

ここまで児童や社会環境の変化を、先行研究を踏まえ考えてきたが、両者は関連している事が考えられる。社会環境が変化している為に、児童の生活や、またその内面までもが以前とは変化しているという事が生じてきているのかもしれない。特に、筆者が危惧する問題は、対人関係や社会性が不得手なまま成長しているのではないかという現状である。他人の気持ちや思いやりといった感情がわからないまま、または他人を理解するという事を知らないまま成長していく現状が存在するのであれば、児童に関わる全ての大人がその事を考え、時には介入していく必要があるだろう。だが、児童個人が自ら経験する事が、何より多くを学ぶ機会になるであろうし、実際に他人と接してみない限り対人関係や社会性は身に付いていかないのではないだろうか。この点を踏まえ、対人関係や社会性を学ぶ場として、集団生活というものの重要性・必要性を考える。その中でも、多くの人間と関わりを持つ事になるであろう「異年齢集団の重要性」について考察する。

異年齢集団の機能・効用について、小石(1999)は、異年齢集団では高学年になるにつれて、積極的な仲間関係が可能となり、社会的スキルを獲得する機会が得られるという事を示している。学級集団内では消極的な児童も、異年齢集団内では積極的に関わる事も可能であり、高学年になるまでに個人が経験してきたものが仲間関係を構築する際に、その経験を踏まえて発揮できるという事に

なっているのかもしれない。学級集団とは違い、様々な年齢で形成されている異年齢集団の機能は、児童にとって、対人関係の構築に必要な経験を与えている可能性がある。

河村(1996)の研究においても、異年齢集団では、協力を図るといった目標達成の為の機能の他に、親和を図るといった集団をまとめる機能も見られており、異年齢集団活動の経験の効果として、社会的スキルやコミュニケーション能力を高める一つの要因としている。また、異年齢集団の中での子どもの役割として、「手順や協力を図る場面において、グループ内での最年長の子どもの作業についての判断・実行をすることにより、目標達成に貢献していることから、リーダー的役割を担っている」という事、「親和を図る場面では、グループ内での最年長児が常に集団をまとめているのではなく、最年少児が成員に(又は、成員が最年少児に)注目することによっても集団のまとまりが図られる」という事を示唆している。

笠井、松村(2007)は、中学生を対象とした調査の中で、学童期に異年齢集団への参加経験を持つ者は、関係回避(一人で遊ぶ、友達にあまりはなしかけられない等)や孤立の行動が少ない事を示しており、学童期において学校外の活動を行うことによって中学生の時点における関係回避行動が少なくなるというのは、地域における異年齢集団活動の重要性を示唆できるものとしている。関係回避行動をとらないこと自体がいわば、社会的スキルの基礎・中核をなすものであり、この他人に対しての行動に異年齢集団活動の経験が生かされているということになるだろう。

他者の福祉や幸福を高める行動(具体的には援助、分与、慰め、寄付、世話などの社会的行動)を向社会行動(prosocial behavior)と呼び、その中でも他人に対しての愛情を愛他性(altruism)と呼ぶ(中島ら, 1999)。河添ら(2002)は、異年齢集団である学童保育に通う児童は、そうでない児童に比べ、異年齢の子どものと接する機会を持ち、かつ愛他性がより発達している事を示している。しかし、どのような指導や体験の過程が発達を促進するのかが明らかにされていない。これはあくまで推測の域だが、異年齢の他人と接する事で対人関係を学び、他人から受けた愛他性を自分も身に付けているのではないだろうか。また、学童保育には指導員という大人の存在がある。この指導員が児童の気持ちに寄り添いながら共に生活し、児童に対して愛他性を持って接する事を行っ

ているとすれば、指導員が愛他性のモデルとなっているとも考えられる。

このように異年齢集団活動での経験は児童にとって多くの事を身に付ける可能性があるといえよう。様々な他人と接する機会がある事から、特に、対人関係能力や社会性についての能力を身をもって学ぶ事となるのではないだろうか。以前の子どものたちの児童期は、「ギャング・エイジ」と呼ばれ年長のリーダーの下に主に屋外での集団遊びが行われていた。以前はギャング集団の中で学んでいたことが現代では学べなくなってきたり、そのことが「孤立化」の問題と重なってくる（小石，1995）。

現代社会では、地域においてこの集団が見られなくなってきたり、学童保育やスポーツ少年団では異年齢集団での活動が行われている。その中で生活し、他人との関係を学ぶことができれば、「孤立化」の問題は解消していくのではないだろうか。児童が成長していく際に、対人関係や社会性を身に付ける要因の一つとして異年齢集団活動が考えられ、児童の発達に関係している事が推察できる。

VI. 考察

以上の事から、異年齢集団活動が児童の対人関係能力や社会性を身に付ける為の環境として、一つの要因となっていることが考えられる。

現在、急激な社会環境の変化に児童までもが巻き込まれ、様々な問題が浮き彫りになっている。その中で、特に他人との関係に不具合があるように感じられ、対人関係や社会性が不得手なまま成長している例も少なくない。そこで、本稿では異年齢集団での活動経験が、児童の対人関係や社会性の発達に関係するとの推測から、先行研究や文献を用いてその可能性を見いだした。児童にとって、他人との関係を構築する為には様々な要素があり、遊びを通して学ぶ事も多く、集団での活動で得る能力の存在も明らかになったのではないだろうか。その中で特に、多くの人間と接する機会がある異年齢集団での活動には、大きな可能性があるかと推測できる。

児童期では、集団の中で児童は様々な経験をすることになり、集団の規則を理解し自分の気持ちや欲求をコントロールしていく事が求められる。この集団を形成していく際に、竹内（2005）は「集団づくりは生活の共同化主体としての自治的集団をつくりだすことを第一主義とするものであって、

教育的集団をつくりだすことを第一主義とするものではない」といっている。安易に大人が集団を形成しては児童の為にはならないのかもしれない。学童保育やスポーツ少年団のような異年齢集団でも同じことが言え、児童もその集団づくりに参加させることが、よりよい集団に発展していくということが考えられる。

本稿では、調査を踏まえた実証をするに至っていないが、異年齢集団での活動が児童の発達に関わる可能性があり、特に対人関係能力や社会性の発達が促進される環境と見解できる。その結果、異年齢集団の持つ影響は大いにあると考えられ、今後の研究に繋がるものであるとの確信を得ることができた。調査方法やさらに詳しく異年齢集団活動の効果を考え、異年齢集団活動の経験がある児童とそうでない児童の比較研究を行うことができれば、学童保育やスポーツ少年団という異年齢集団の重要性を示せるものとなるだろう。

<参考文献>

- 有菌 格・齋藤 陽子（2008）現代社会と教育—地域基盤社会にむけたこれからの教育 教育開発研究所 p.123.
- 岩崎 未来（1998）地域の学年を越えた縦関係の実態 —学童保育における異年齢集団の存在—（<http://www.apa-apa.net/~jinrui/soturou/paper/iwasaki.ntml>）.
- 笠井 達夫・松村 昌弘（2007）学童期における異年齢集団活動と社会的スキルの習得 徳島文理大学研究紀要 第74巻 p.43-53.
- 河添主、近藤永二、横山貴史ら（2002）「学童保育の経験が児童に及ぼす影響についての研究」福岡教育心理学特殊実験要約集vol.34（<http://psyco.fukuoka-edu.ac.jp/summary/images/Nakasima02.pdf>）.
- 河村 由香（1996）異年齢集団における子どものコミュニケーション方法 平成8年度大学院修士論文要旨 大妻女子大学紀要—家政系— 第34号 p.247-249.
- 小石 寛文（1995）児童期の人間関係 培風館 p.122.
- 小石 寛文（1999）小学生の同年齢集団内と異年齢集団内における仲間関係の取り方や自己効力の違い 日本教育心理学会総会発表論文集41 p.439.
- 堺 賢治・藤原 誠・伊賀上 哲旭・山本 孔一（2007）子供の遊びとリーダーシップに関する

- 研究 —スポーツクラブと学校生活の関係を中心にして— 愛媛大学教育学部紀要 第54巻 p.119-127.
全国学童保育連絡協議会 (<http://www2s.biglobe.ne.jp/~Gakudou/>).
- 竹内 常一 (2006) 「集団づくり」とはなにか —学童保育への問いかけ— 学童保育研究 第6号 p.8-16.
- 深谷 昌志・深谷 和子・高旗 正人 (2006) いま、子どもの放課後はどうなっているか 北大路書房 p.16-32.
- 中島 義明・安藤 清志・子安 増生ら (1999) 心理学辞典 p.3.
- 中村 雅彦 (2004) 人間関係の発達心理学3 児童期の人間関係 培風館 p.43-64.
文部科学省 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/071107.htm).
- 渡辺 広人・松崎 展也・佐藤 公代 (2004) 児童の仲間集団形成に及ぼす遊びの役割—調査法の試み— 愛媛大学教育学部研究紀要 教育科学 第50巻 p.73-81.
- 渡辺 広人・佐藤 公代 (2005) 児童の遊びに関する研究—社会的スキル、向社会的行動、肯定感との関連について— 愛媛大学教育学部紀要 第52巻 p.61-78.

